No.

Date 26/10/15

はじめに pp.2〜13

◦書籍概要

・ポップミュージックの方法 ー理論という名の偏愛と鍛錬ー
(にしがも先生、ZRO inc)

・本番、あのこれ!も先の理論本、これを読むために最近の本読み進めてた。
(まあアレまだ読み終わってないけど)

・単純にP-MODELと関連本としての興味だったが、理論書としてはかなりハイレベルなものらしい、ゆっくりやっていこう。

◦前説

「機能和声」という語
- 機能:個々の各部分が全体の中で担っている固有の役割
- 和声:ひとりひとりが独立した流れでの声部進行で担う各者の集合

ここまでの歴史の概略
- BC 600〜300:調律の発見
- 中世前紀:モノフォニー(単旋律)
- 〃 中紀〜ルネサンス:ポリフォニー(複数の旋律を同時演奏)
- 18〜19世紀:ホモフォニー(単旋律+伴奏)
  - ベートーベン
  - マルクス
  - モーガン

ポップミュージックは基本これ。

「既存の理論」をルールとして「作った理論」でソールにしたい、というのが筆者の意図。
以降の議論展開もその意図に沿ったもの、とは意識して読む。

・インターバル(音程)の読み方
基本的には以前の本でやったので省略。

この本では
- 完全N度:PN
- 長N度:MN
- 短N度:mN

といった省略表記を使う。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836BT 6 mm ruled×36 lines

No.

Date

コードとは？ pp.14〜19

- コードとは：マザースケールを3度堆積したもの
  マザースケールうたぶん基音のこと？
  └それに対して、上方倍音のM3と下方倍音のm3で組み合わせたもの
  ※上方倍音：てもとうな楽器の1音を鳴らすと、その音の整数倍に高調波が立つ（音楽的には倍音と呼ばれるもの）
  テーラー展開したときのn=2以上のfスペクトル
  ふつうの音は高次倍音ほど振幅が落ちるが、高次の倍音にも関わらずピークが立つものがある⇒フォルマント
  下方倍音：上方倍音と同じ間隔の周波数を基音より下に当てはめたもの

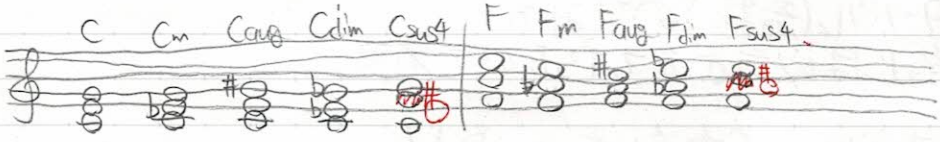
基音+M3+m3の3音⇒トライアド（三和音）

① R+M3+P5 → M
② R+m3+P5 → m
③ R+M3+aug5 → aug
④ R+m3+dim5 → dim
の4種類

変化形→ R+P4+P5 sus4
R+M2+P5 sus2
※変化形は近傍コードに解決しようとする

- susコードの解釈
  Sus-pender：吊り上げるやつ
  └コード進行の上で一瞬テンションを張り、すぐ通常トライアドに戻ろうとする
  {ドミナント7thにはオルタードテンションで使える
  {Sus4コードはオルタードでない

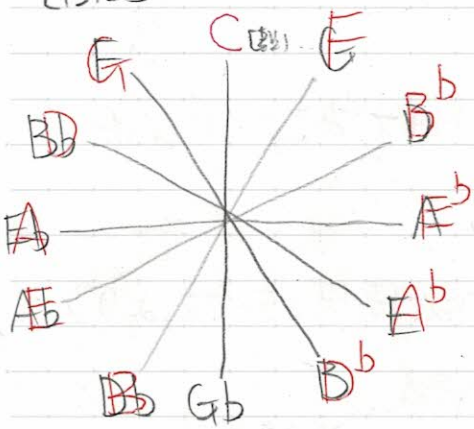
[問1]



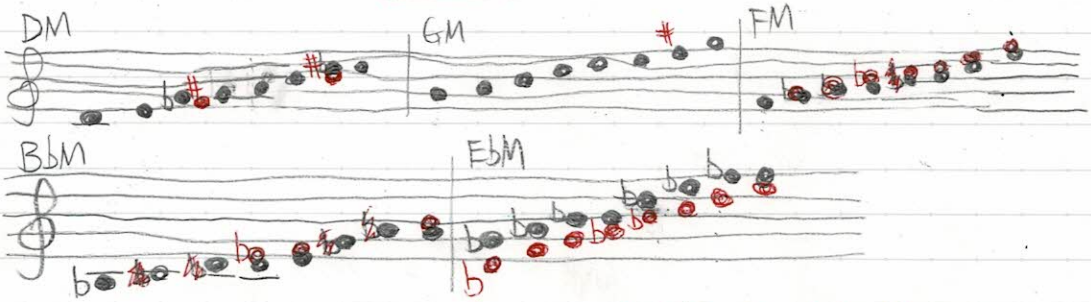
※オルタード：もとから半音変化した何かのこと

◦ Cycle of 4th (= Cycle of 5th)
[P.12]

※ 5度圏(ないし、4度圏)
12音を時計回りに、4度上ないし
5度下を順番に並べると、
12回めで最初に戻る、という図



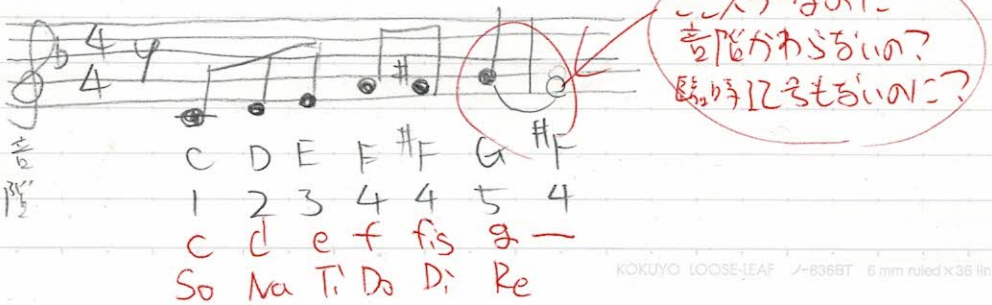
◦ Major Scale = Ionian Scale (長音階)
「ド→レ→ミ→ファ」
「ソ→ラ→シ→ド」 } 全-全-半- の組
これをそのままくっつけたのが長音階
[P.13]



たぶん……5線譜はすべてこれくらいになるように
配置しないといけない(蛇足ながらかもしれんけど)

◦ 音名と階名とか
音名: pitch ここでは英語かドイツ語で使う、
下から C D E F G A B

階名: scale tone
一般的な階名以外にも、「トニック・ソルファ」「ラダイメソッド」「ガランメソッド」
※ PP.18の表はよく読んで入れておく、
[P.14]



・bや#のそもそもの意味

もともとBがなんか高いのと低いのの2つあった

- 高いBを角ばったb ♮ ⟶ #
- 低いBを丸いb ♭ 活版で変形 b

おとなBもどこかでhになってドイツ音名はHまであるようになった

・もっと戻って「ミュージック」の意味

- 道具の音楽 musica instrumentalis
- 人間の音楽 musica humana （中世の教科書「ボエティウス」より）
- 宇宙の音楽 musica mundana

4大元素（錬金術のアレ）に対しての3つの音楽、

~~これすべてを理解することが宇宙の法則を理解すること、とされた、~~